

真吉とお母さん

小川未明

青空文庫

真吉しんきちは、よくお母かあさんのいいつけを守まもりました。お母かあさんは、
 かわいい真吉しんきちを、はやくりっぱな人間にんげんにしたいと思おもつていま
 した。そして、平常いづも、真吉しんきちに向むかつて、

「人ひとは、なによりも正しようじき直ちかでなければなりません。また、よわ
 いものを、いじめてはいけません。正ただしいと思おもつたら、相手あいてがい
 かに強つよくても、恐おそれずに、信しんじたことをいわなければなりません。
 昔むかしの偉えらい人ひとは、みんなそうした人ひとたちでありました。また、小ちいさ
 な日にっ本ぽんの国くにが、大おおきな国くにと戦たたかつて、勝かつことができたのは、日にっ
 本ほん人じんにこの精せい神しんがあつたからです。貧びん乏ぼうをしてもけつして
 曲まがった考かんえを持もつてはならないし、困こまつていゝものがあつたら、

自分の二つあるものは、一つ分けてやるようにしなければなりません。」と、日ごろから、よくいきかされたのであります。

真吉は、外にいても、内にいても、よくお母さんの手助けを

しましたが、お父さんがなかつたので、奉公に出なければなら

なくなりました。それも、遠い東京へゆくことになりました。

東京には、まだ顔を知らない叔父さんが住んでいられて、い

い奉公口をさがしてくだされたからです。

なつかしい川、森、野原、そして、仲のいいお友だちや、かわ

いいペスに、白のいる村から、そればかりか、やさしいお母さん

と別れなければならぬのは、どんなに真吉には悲しいことであ

ったでしょう。

「僕、お母さんといっしよなら、どんなさびしいところでもゆく
のだからなあ、そして、ちつとも、さびしいことはないんだがなあ
。」と思つて、涙にくれました。

お母さんは、お母さんで、まだ年のいかない、だいじな、かわ
いい子を手もとからはなすのは身を裂かれるような苦しみであり
ました。

「夜中に、夜具からはみだしても、いままでのように、だれがか
けてくれるだろう。かぜをひかなければいいが、なにから、なに
まで、私が世話をししてやったのが、もう旅に出れば、めんどろを
見てくれるものもないだろう。」と、お母さんは、ひとりで考え
て、涙をふいていました。

しかし、一家の都合では、どうすることもできません。いよいよ真吉の出発の日がやってきました。お母さんは、泣き顔を見せてはいけな**い**と思つて、

「さあ、元氣よくいつておいで。道中氣をつけて、あちらに ついたら、この赤いふろしきを持って改札口を出ると、叔父さんが、迎えに出**て**いてくださるから、お母さんの、日ごろいったことをよく守つて、偉い人になつておくれ。こちらのことは、けつして、心配しなくていいのですから。」と、おっしゃいました。

真吉は、日本男子というものは、泣くものでないと、学校の先生からきいていたので我慢をして、

「いつてまいります。」と、頭あたまをさげて、家うちを出でました。そして、後あとをふりかえり、ふりかえり、二里りの道みちを歩あるいて、町まちへ出でて、そこから汽車きしゃに乗のつたのであります。

はじめに、遠方えんぼうへゆく、汽車きしゃに乗のつたので心こころ細ほそかったです。窓まどぎわに小さちいくなつて、自分じぶんの村むらの方ほうを見みていると、武たけちやんや、哲てつちやんが往來おうらいで遊あそんでいる姿すがたが見みえます。ペスが尾おをふつて、どうして今日きょうは、真しんちやんはいないのかなと不思議ふしぎに思おもっている顔かおがありありと浮うかんできます。

真吉しんきちは、たまらなくなつて、しくしくとそでに顔かおをあてて泣ないたのでした。そのうちに汽車きしゃは動うごき出だしました。だんだん走はしると、いつか、見覚みおぼえのある山やままでが、ついに見みえなくなつてしま

いました。

「いまごろ、お母さんは、どうしていられるだろう。」と思うと、仕事しごとをなさっているお母さんの姿すがたが、泣ないている目めの中なかにうつつて見みえたのでした。

しかし、それから、一時間じかんもたつと、真吉しんきちは、泣ないてはいませんでした。はじめて顔かおを見みる叔父おじさんのことを考かんえたり、はやく、自分じぶんが太おおきくなって、お母かあさんの力ちからになつてあげたいと考かんえていました。

汽車きしゃに乗のつてから、九時間じかんめに東とう京きやうへ着つきました。叔父おじさんが迎むかえに出でていてくださいました。

「よく、一人ひとりでこられたな。感かん心しんじゃ。」といつて、我わが子この

ように、頭あたまをなでてくださいました。

その、あくる日ひから、二、三日にちというもの、叔父おじさんは、いそがしい体からだを真吉しんきちをつれて、にぎやかな東とうきよう京きやうを見物けんぶつさしてくださいました。真吉しんきちは、ほんとうにやさしい、いい叔父おじさんだと思おもいました。

いよいよ叔父おじさんの、世話せわしてくだされたお店みせへゆくときに叔父おじさんは、

「よく、ご主人しゅじんのいいつけを守まもって、辛棒しんぼうするのだよ。そして、平常ふだんは、出でられないが、お正月しょうがつにでもなつたら、ゆつくり遊あそびにおいでよ。」と、おつしやいました。

お店みせの主人しゅじんは、たいそう厳格げんかくな人ひとでした。

「ゆるしなく、かつてに出歩でいたり、また泊とまってきたようなものは、さっそく店みせを出でていってもらおう。」という規則きぎてくがありました。

真吉しんきちは、ここにきてからは、よく主人しゅじんのいいつけを守まもつて働はたらきました。また、自分じぶんのお友ともたちとも仲なかよくいたしましたから、みんなから愛あいされたのです。この分ぶんなら、自分じぶんでもつとまりそうに思おもいましたが、夜よるねるにつけ、朝目あさめをさますにつけ、思おもい出だされるものは、お母かあさんの顔かおでありました。

「いまごろ、お母かあさんは、どうなさっているだろう。」

こう思おもうと、お母かあさんのことと思おもわれて、なりません。夜よるになつてから、お母かあさんにあてて手紙てがみをかい出だしました。三、四よっか日

すると、お母さんかあから、返事へんじがまいりました。あけてみると、
 「お母さんかあは達者たっしやでいますから、心配しんぱいしないでいい。おまえ
 はからだをだいじに、よくおつとめなさい。」と、書いてありま
 した。

真吉しんきちは、お母さんかあからきた手紙てがみだと思おもうと、なつかしくてだ
 いじにしまっておきました。また、十日とおかばかりたつと、お母さんかあ
 が恋こいしくなりました。ついに我慢がまんがしきれなくなつて、手紙てがみを
 書かいて出だしました。こんどは、待まつても、お母さんかあから、返事へんじがま
 いらりませんでした。

ひとつき、ふたつき
 一月、二月とたつにつれて、ますますお母さんかあや、田舎いなかの
 ことおもが思おもい出だされてなりません。

「それにしても、どうしてお母さんかあから手紙てがみがこないのだろう。病びょうき気で、ねておいでなさるのではないかしらん。」

こう思うと、母ははおやおも親おも思はいの真吉しんきちはたまらなくなりました。

そのうちに、お正しょうがつ月がつがきて、一日いちにちおひまがで出でました。泊とまりにいく、親しんせき戚せきのあるものは、泊とまつてきてもいいというのでした。

真吉しんきちは、久ひさしぶりで、叔父おじさんの家うちへいこうと出でかけたのであります。ふと、あちらの停てい車しゃ場ばをはっ発はしてゆく、汽き車しゃの笛ふえの音おとをききました。

「そうだ、一日いちにちあれば、田舎いなかへ帰かえつてくることができる。お母かあさんのところへいこう。」

こう考かんがえると、もらったお小使こづかいがふところにあつたのですぐさま、停てい車しや場ばへかけつけました。ちようど、北きたへゆく汽き車しやがあつて、それにのりました。

汽き車しやの中なかは、ススキキーにゆく人ひとたちで、にぎやかでした。真しん吉きちは、これを見みて、

「雪ゆきがふると、お母かあさんは、町まちへ出でるのに、どんなに不自由ふじゆうをなさるかしのれない。それなのに、この人ひとたちは、遊あそびができるといつてよろこんでいる。」

こう思おもうと、その人ひとたちがにくらしかつたのでした。いつしか、その人ひとたちも、途とち中ちゆうで降おりてしまいました。いつまでも乗のつているのは、真しん吉きちのほかほかに三さん、四にん人で、さびしくなりました。そ

して、雪が、だんだん深くなりました。

けれど、晩には、お母さんの顔が見られるのだと思うと真吉

の心は、うれしくて飛び立つばかりでした。

やっと、半年ばかり前に、そこから汽車に乗って立った、町

の停車場へ着くと、もうまったく暗くなっていました。そして

雪が積もる上に、まだ降っていました。

真吉は、お母さんの知り合いの呉服店を思い出しました。

そこで堤燈を借りてゆこうと立ち寄りしました。ふいに、真

吉が帰ってきたので、呉服店のおかみさんは、おどろいて、

「まあ、どうして帰っていたのか。」と、たずねました。

真吉は、お母さんのことを心配して、見に帰ったと話すと、

「なんの、お母かあさんは、お達たつしや者でいらつしやいますよ。昨日きのうおいでになつて、東とうきよう京へいつている息子むすこの春着はるぎを造つくつてやるのだと、反物たんのものを買かつてお帰かえりになりました。」と、おかみさんは、告つげました。

真しんきち吉は、これをきくと、安あんしん心して、いままで、張はりつめた気持きもちちがなくなりました。そして、お母かあさんの、真まごころ心からの教おしえが、

「お母かあさんのことは、心しんぱい配しなくていいから、よくおつとめなさい。」と、おつしやつたことが、頭あたまの中なかにはつきりと浮うかんできました。

たとえ、これから家うちへ帰かえれても、この雪ゆきでは、明日あすの中うちに東とうき

京へ帰ることはむずかしい。そうしたらご主人が心配なされるだろう。お母さんの達者のことがわかつたうえは、いまからすぐに夜行に乗って、東京へゆくことにしようと、真吉は、思いました。そして、呉服店のおかみさんが、しんせつに泊まつていったらというのをきかずに、停車場へ引き返して、出立したのでした。

翌日、真吉は、東京へ着くと、すぐにお店に帰って、昨日からのことを正直に主人に話しますと、主人は、真吉の孝心の深いのに感歎しましたが、感情に委せて、考えなしのことをしてはならぬと、この後のことを戒めました。

真吉は、大きくなってから、りっぱな商人になりました。

そして、お母^{かあ}さんによく孝^{こう}行^{こう}をつくしたということでもあります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「真吉《しんきち》とお母《かあ》さん」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

真吉とお母さん

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>